

元禄九丙子年朝鮮舟着岸一卷之覚書

(読下し文)

朝鮮舟着岸一卷之覚書

隠岐国嶋後

一朝鮮舟一艘

長

上口 三丈
下口 二丈

幅

中にて上口 一丈二尺

深サ

四尺二寸

但し八〇石程積み申すべく候

檣(帆柱) 二本

帆 二つ

梶 一羽

櫓 五挺

蓬

木綿のはた 二つ

木碇 二挺

からそ綱 四房

敷物 ござ

犬の皮

*楮

一船中人数

十一人

俗

安龍福

俗

李裨元

俗

金可臬

俗

三人名書き出さず

年書き出さず

*司臬

坊主

雷 憲

坊主雷憲弟子

衍 習

坊主 三人名年書き出さず

一安龍福

午年四十三

冠のようなる黒き笠 水精の緒

浅黄木綿の上衣を着け申し候

腰に札を一つ着け申し候

表に通政太夫

安龍福 年申午生

表に住東萊 印彫入

印判小さき箱に入

耳掻き楊枝 小さき箱に入

この二色扇に着け持ち申し候

一金可果 年書き出さず
冠のようなる黒き笠木綿の紐
白き木綿の上衣を着申し候
扇を持ち申し候

坊主

フシコウソ

一興旺寺の住持雷憲 年五十五

冠のようなる黒き笠 木綿の紐

細美の上衣を着、扇を持ち申し候

己巳閏三月十八日金鳥山の

朱印状雷憲所持仕り候を出し申し候に

つき、則ち 写し申し候

康熙二十八年閏三月二十日

金鳥山朱印の書き付け、雷憲

所持仕り候を出し申しに付き、則ち、写し申候

箱一つ 長さ 一尺

幅 四寸

高さ 四寸

錠の金具在り

内に算木在り、竹にてこれを作り申し候

懸籠（かけご）に硯を仕組み申し、筆墨在り

雷憲弟子アンスツ

一坊主行習 年三十三と申し候

一右、安龍福、雷憲、金可果

三人へ在番人立会いの時

朝鮮八道の図を八枚にして所持仕り候を

出し申し候 則ち、八道の名を書き写し朝鮮の

詞を書き付け申し候三人の内安龍福通詞にて（ヲ）

事を問い申し候へば、答え申し候

一舟中に荷物これ在り候哉と尋ね候えは

干し鮑少し、和布少しこれ在り候 是は食事の

際に仕り（食べる事）候由申し候 後に船中書付を**もつて**別に御座候

一船中に坊主五人乗せ候儀尋ね候へば竹

嶋見物をのぞみに付き同道仕り候由申し候

一沙門宗派五人共に一宗か又は別宗か

何宗ぞと尋ね候えは雷憲その問いの書き

付けに答えを書き記し申し候 然れども其の訳

不分明様に相聞こえ申し候 之により翌二十一日

宗旨名伯州へ参り候訳、荷物などの

儀書き付け相尋ね候へば、病人李裨元筆者

にて書き出す書き付け有り 則ち、差し上げ申し候

一安龍福申し候は竹嶋を竹ノ嶋と

申し、朝鮮国江原道東萊

府の内に鬱陵嶋 と申す嶋

御座候 是を竹ノ嶋と申す由申し候

則ち、八道の図に之を記し所持仕り候

一松嶋は右同じ道の内 子山と申す

嶋御座候 是を松嶋と申す由、是も

八道の図に記し申し候

一 当子三月十八日朝鮮国朝

飯後に出船 同日竹嶋へ夕べに着く
夕飯給(たべ)申し候由申し候

一 舟数十三艘に人一艘に九人

十人十一人十二・三人十五人程(つづ)

乗り、竹嶋まで参り候由 人数の

高(合計) 問い候ても一円申さず候

一 右十三艘の内十二艘は竹嶋にて

和布鮑を取り、竹を伐り申し候

この事を只今(現在)仕り(仕事中の意)候 当年は鮑
多くもこれ無き由申し候

一 安龍福申し候は、私乗り参り候船には

十一人伯州へ参り鳥取

伯耆守様へお断りの義これ在り罷り

越し申し候 順風悪布候て当地へ寄り申し候

順次第に伯州へ渡海仕るべく候

五月十五日竹嶋出船 同日松嶋へ

着き同十六日松嶋を出て十八日の朝

隠岐嶋の内、西村の磯へ着く

同二十日に大久村へ入津仕る由申し候

西村の磯は荒磯にて御座候につき

同日中村へ入津 この湊(港)悪く候故

翌十九日彼所出で候て同日晩に

大久村の内、かよい浦と申す所に

舟懸り仕り、二十日に大久村へ参り

懸り居り申し候

* 彼所・・・か

一 竹嶋と朝鮮の間三十里竹

嶋と松嶋の間五十里これ在る由申し候

* 「とらへ」か

一 安龍福ととらへ二人四年以前

西の夏竹嶋にて伯州の舟に連れられ

参り候 そのとらへもこの度召し連れ

参り、竹嶋に残し置き申し候

一 朝鮮出船の節、米五斗三升入り

十俵積み参り候へども十三艘の者共

給(たべ)申し候につき、只今は飯米乏しくなり候

由申し候

* 二十か三十か

一 伯州用事(渡海目的)仕廻し、竹嶋へ戻り

十二艘の舟に荷物を積せ

改め仕り、六・七月のころ帰国仕り、殿へも

運上を差し上げ申す筈の由申し候

* 上は敬語にて、「差し上げる」

一 竹嶋は江原道東萊府

の内にて朝鮮国王の御名

クモシヤン[㊦] 天下の名主上東萊府殿の名 一道方伯 同所支配人の名 東萊府使と申し候由申し候

一 四年以前癸酉十一月日本にて下され候物共書き付けの帳一冊出し申し候 則ち、これを写し申し候

一 三人へ在番人对談終り舟へ

三人とも帰りその後書簡を差し

出し千鮑六包、内一包は大久村

庄屋へ、五包は在番人への心入れ

にて指し越し候へども、六包ともに返し申し候

その書簡の奥に生菜・菁菜

実果請うと御座候につき、苜・根深

榲桲・芹・生姜など遣わし申し候 もっとも

書簡の返事をも相添え遣わし申し候

一 二十一日安龍福より書き付け出し申し、飯

米に切れ 夕飯より食に絶へ候由申し

越し候につき、舟へ庄屋、与頭右衛門罷り

越し、様子相尋ね候へば、飯米これ無く

難儀致し候 朝鮮にて他国の舟

参り候へば馳走いたし候ところに、此元にては

大凡成る義のように申し候につき、庄屋申し候は

此元(爰許)も異国舟風に放たれ参り候節は

飯米等その外、所(土地)相応の儀は御

調(ととのへ)遣わさることに候 その方儀 鳥取

伯耆守様へ

訴訟これあり参り候との申し方にて候間

飯米等用意致し参らるべき事と申し候へば

不審尤も成る義に候 竹嶋十五日に出で候

へば、そのまま日本の地へ着くなど申し候 日本

の地にては御如在これ無きと存じ、右の通りに候と

申し候 然れども覚束無く候間、船中見申す

べしと庄屋申し候へば、なるほど見候様にと

申すにつき、見分仕り候へば、飯米入れ候 吠の

内に白米三合ほど残り申し候 庄屋申し候は

飯米切れ申し候段見届け申し候爰元は

去年の作不熟にて米払底にて候

少々これ在り候ても悪米にて候 苦しからず候わば

少しは才覚仕るべき由申し候へば、才覚致し

くれ候ようにと申すにつき、在番所より参り候

までは延引につき、大久村地下(地元)より取り合わせ

白米四升五合遣わし申し候 朝鮮升(枴)

一斗一升五合に計り立て手配を申し候

追っ付け在番より米参り候を、則ち白米に

仕り(…して)一斗二升三合遣わし候へば、朝鮮

升(枴)三斗に計り立て手配を申し候

右、兩度の米二十一日の夕と二十二日

三度の飯米これ在る由申し候につき、その

* 如在は住まいすること

積もりをもつて追々（順次）米才覚仕り、時々
飯米あてがい渡し申し候

一十一人の内、名・年知れ申さず分
猶また宗門の義銘々に願は書
記し 伯州へ訴訟の訳書き付け出し候
ようにと申し候へば、始めは心得候由申し候
ところ、二十二日朝に至りその事とも
書き出すに及ばず候 伯州へ参り、委
細申し上ぐべき由、重ねてはその問う事無
用に仕るべき由書き付け出し申し候 則ち、差し上げ
申し候

雷憲二十二日に陸へ揚がり候時の

装束は

一 上衣は白木綿のねずみ（鼠色）に

似たるを着し申し候

一 帽子は本朝禅宗の用い候様

なるを着し申し候

地は細布（苧布） 裏は白き麻

一 珠数も禅宗の用い候様なるを

持ち申し候 玉の数十ばかりこれ在り 笠は

着け申さず候 弟子衍習もあがり申し候

装束雷憲と同断

但し、衍習が珠数の玉太さ同じく

数は多く相見え申し候

右、二十二日安龍福、李裨元、雷憲
同弟子陸へ上がり候ことは西風強く船
中静かならず、物書き候義成らず候間、陸へ
上がり書き申すべきと申すにつき、海辺近き
百姓家へ入れ申し候處、その時に至り
前々書き付けばかり書き出し申し候 二十一日舟
をも證懸り申し候書簡、今度の
訴訟一卷となされ長々と仕りたる
下書きを致し、本書をも證懸り
候へども二十二日陸へ上がり相談仕り変え
申し候様に相見え申し候、併せて前の書き付け
にて始終大体訳聞こえ申し候
様に存じ奉り候。その通りにて差し置き申し候

一 二十一日より二十三日までも風雨強く
御座候て、西郷へ朝鮮舟廻し候
事引き舟に仕り候ても成りがたきに付て
番舟申し付け役人ども付け、大久村に
其のまま指置き申し候 総じて十八日より
西風毎日強く船路の通い
罷り成らず荒れ申し候

一 石州へ右ご注進のため松岡弥次右衛門
渡海申し付け候につき二十二日弥次右衛門
呼び戻し、高梨左衛門・河嶋理太夫

* 渡海申候・・に見えるが不読

大久村へ遣わし置き申し候 飯米等廻し
見計らい、庄屋方より渡させ候につき
朝鮮人悦び申す由にて書き付け指し
出し申し候 則ち、差し上げ申し候
右、この度朝鮮人一卷之書き付け
並びに朝鮮人出し候書き付け目録にこれを
記し、弥次右衛門持参仕り候口上にも
申し上ぐべく候以上

中瀬 弾右衛門

五月二十三日

山本 清右衛門

石州

御用所

(*これより調査記録は別記にあたる)

朝鮮舟在之道具之覚

一白米 吟に三合ほど残り申し候

一和布 三表(俵)

一塩 一表

一千し鮑 一束

一薪 一ヶ

一竹 長 六尺八寸 但し一尺廻り

六本同 三尺五寸

同 三尺

一刀 一腰この刀武器には用い難し

あらく相成るものに候

一脇指 一腰この脇指柄(物)脇指に候へども

料理などいたし候につき包丁

同然

一鍵 四筋いずれも鮑取り器物の由、長柄(物)は

四尺ばかり

一長刀 一

一半弓 一

一矢 一箱

一帆柱 二本の内 一本は八尋(ひろ)

一本は六尋 内一本は竹の由

一帆 二端内 方 五枚下り 六枚

方 四枚下り 五枚

一梶 一羽 一丈四尺五寸

一水縄綱 藁(わら)

蔓(かずら)

志な

一 苦 十枚計りの内二枚 長け 五尺 横一丈二尺

一 犬皮 残り日本の苦より少し大きい

一 敷き莫座 三枚

三枚帆（机）こさの類にて候

* 帆・「机」か

右の通り見分仕り候ところ紛れ御座なく候

朝鮮人俗名

李裨元 金可杲

* 司杲

柳上工 金甘官

ユウカイ この字相尋ね候えども書き

* ㄷ は「候」か「之」か

申さず候 下ㄷ 歎毎度

末座に居り申し候

安龍福ともに六人俗

僧 侶

興旺寺の雷憲

靈 律 丹 冊

騰 淡 衍 習（雷憲弟子）

* 筆字は異体字：靈
* 騰は …勝

右、五人坊主
合わせて十一人

朝鮮之八道

京畿道

江原道 此道ノ中ニ竹嶋松嶋有之

金羅道

忠清道

平安道

咸鏡道

黄海道

慶尚道

